

東アジアの鉛釉陶器の 意義と陶磁史上の位置づけ

西アジアとの比較において

The Significance and Evaluation of East Asian Lead-glazed Pottery
in the History of Chinese Ceramics: in Comparison with West Asia

弓場紀知

はじめに

①東アジアの鉛釉陶器

②鉛釉陶器の陶磁史上の位置づけ

【論文要旨】

彩釉陶器の誕生は西アジアにおいて始まった。紀元前10世紀ごろの宮殿のタイル装飾に彩釉陶器が用いられたのが最初である。初期はアルカリ釉を媒溶材として用いているが、アケメネス朝ペルシア、ローマ時代には鉛釉が媒溶材として用いられ緑釉陶器や褐釉陶器が作られた。

漢代の鉛釉陶器はローマ時代の鉛釉陶器と技術的に共通しており、東西両世界での技術交流の可能性をうかがわせる。中国では北朝時代、山西・河北の鮮卑族の墳墓の副葬品に緑釉、黄釉、白釉、緑彩などの鉛釉陶器がある。この時期の鮮卑族の王墓からはササン・ペルシア製の金銀器やガラス器が出土しており、鉛釉陶器も西方の文物の流入に影響を受けて発達したものと考えられる。唐三彩は従来は8世紀前半、盛唐期に発達した彩釉陶器とされていたが、その萌芽は北朝後期にある。日本では白鳳期の寺院址や祭祀遺跡、墓葬から唐三彩が出土している。中国では唐三彩は墓葬用の明器として用いられたが、日本では貴重な文物として受け入れられ、その模造品として奈良三彩が製作された。

唐三彩は8世紀中葉を期にその製作はとどめる。9世紀の三彩陶器は盛唐期の三彩とは質を異にする新しい彩釉陶器である。唐三彩は墓葬用明器であったが、9世紀の三彩陶器は実用器である。この時期の三彩陶器の製作をうながしたのは西アジアのイスラム世界との交易である。中国揚州唐城とイラクのサーマラー遺跡で同じ白釉緑彩陶器が出土しており、これは単に東方の鉛釉陶器がイスラム圏に輸出されたのではなく、イスラム圏の嗜好を中国側が受け入れて作りだした新しい彩釉陶器である。中国の彩釉陶器の誕生とその発達は常に西アジアとの交流の中で考えるべきであり、陶磁器における東西交流の重要な示標なのである。

はじめに

古代の日本において唐三彩は特別の意味をもっていた。井上喜久男⁽¹⁾によれば日本出土の唐三彩は50ヶ所以上にのぼっている。その遺跡の種類は寺院址、都城址、祭祀遺跡、墳墓、官衙址などで、なかでも都城址は25ヶ所とほぼ半数を占め、寺院址が11ヶ所、郡衙・官衙址が4ヶ所、集落址が10ヶ所などである。都城址、寺院址・郡衙・官衙址などはいずれも官衙的色彩の強い遺跡であり、奈良時代の律令体制下での政治的中心の地となった遺跡である。こうした出土地点の分布をみるかぎり、日本において唐三彩がきわめて「ステイタス」の高い舶載品であったことがうかがわれる。しかし中国以外で唐三彩を出土しているのは韓国と日本だけであり、他の周辺諸国には唐三彩の出土の事実はみとめられない。唐三彩という軟質の陶器が航海という唐三彩の運搬に不向きな方法によって、何故日本にこれほど多く将来されたのか。また、これまでいくたびか説かれてきたように唐三彩が中国ではもっぱら副葬用明器として使用されたのに、日本ではその本来の意味は理解されず、古墳時代の鏡や舶載の金銅製馬具と同じように一種の「ステイタス」をもったものとして受け入れられたのである。この点についても唐三彩は日本では独特の意識があったに違いない。

一方、唐三彩を生みだした中国においても、唐三彩は中国陶磁史上では特殊なやきものとして位置づけられるべきである。すなわち生活用の陶磁器としての青磁や白磁は、時代の需要、生活様式の変化に応じてさまざまな発展をたどり、さらには輸出磁器としてアジア帯にその販路をひろげ、経済的発展を遂げていった。それに対し、唐三彩は中国では使用者（需要者）がきわめて限られており、その用途も墓葬のための副葬品としてのみ用いられたのである。

しかし唐三彩は晩唐代、副葬用明器から日常生活器への質的転換をとげる。いわゆる晩唐三彩と呼ばれる彩釉陶器である。それは日本の奈良・平安時代の都市遺跡や、西アジアの都市遺跡などから出土している。さらにはその流れは遼、宋代の陶器の中に受けつがれ遼三彩、宋三彩、元三彩、素三彩へと三彩の系譜は長くつづくのである。西アジアでは9世紀代、多彩釉陶器がイランやイラク、エジプトを中心とした地域でつくられている。色彩を強く表現する点においてイスラム陶器は中国の陶磁器と大きくことなる。装飾の重要な手段として緑釉や青釉、黄釉、ラスター釉を用いたのである。しかし陶磁器としての質はイスラム陶器は中国の陶磁器にははるかにおよばない。イスラム陶器と中国陶磁器の陶磁器としての影響関係は、あくまで中国陶器が高く位置づけられ、その模倣としてイスラム陶器がとらえられている。しかし筆者がかつて指摘した通り、9世紀におけるイスラム陶器と中国陶磁器の影響関係は従来考えられていたよりも複雑であり、その両者の交流は密であると考えられる。

小稿では唐三彩を中心として、中国の鉛釉陶器と東アジア、西アジアの鉛釉陶器の影響関係について考えてみたい。

①……………東アジアの鉛釉陶器

鉛釉陶器は酸化鉛を媒溶剤として、酸化鉄や酸化銅、コバルト、マンガン等を加えることによ

て褐釉、黄釉、緑釉、紅釉、紫釉、藍釉などに発色させた彩釉陶器である。色彩におもきを置いた陶器、それが鉛釉陶器である。西アジアではペルガモンのイシュタル門（ベルリン・ペルガモン美術館蔵）の陶壁に象徴されるように、建築物の内装に色釉タイルが早くから用いられてきた。それは紀元前6世紀にまでさかのぼる。陶器としての質は軟質であり、生活器としてのクオリティは低いやきものである。しかし、宮殿の内壁を色彩あざやかに飾るためには、こうした彩釉タイルは大きな装飾効果となったに違いない。しかし、この彩釉陶器が中国で誕生したのは紀元前後であり、その用途もきわめて特殊であった。

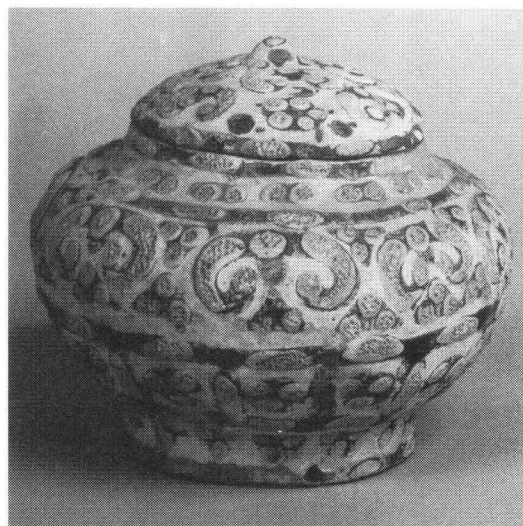


図1 ガラス玉嵌入小壺 戦国時代
高 10.5 cm 東京国立博物館蔵

(1) 中国における鉛釉陶器の誕生とその背景

中国の鉛釉陶器の誕生についてかつて筆者は検討したことがある。鉛釉陶器のもっとも古い作例として知られているのは東京国立博物館や大英博物館にある彩釉小壺（図1）である。土器質の粗い胎土にペースト状の鉛ガラス釉を塗り、さらにその上にガラス粒を円状に象嵌した、きわめて特殊なものである。現在4例⁽³⁾だけしか遺例が知られておらず、それらはほぼ同形同大であり、同時期の作と考えられるものである。戦国期の鉛ガラスのトンボ玉（図2）の技法と似ており、欧米の研究者は早くから初期の中国の鉛釉陶器の例としてきた。日本でも梅原末治や水野清一がこの彩釉壺について論じているが、「特殊」な作例という感はぬぐえない。戦国期の作例としてネルソ

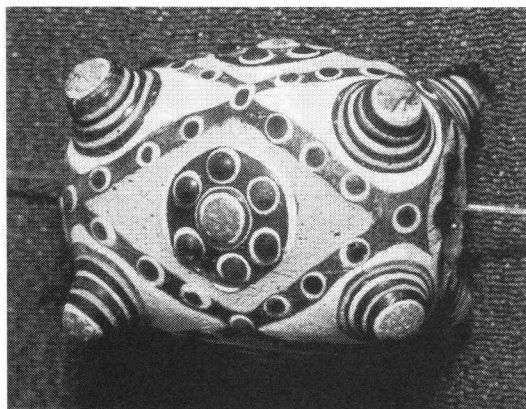


図2 トンボ玉 戦国時代 永青文庫蔵



図3 緑釉蟬文壺 伝河南省洛陽市金村古墓出土
戦国時代 高 22.2 cm ネルソン・アトキンスギャラリー



図4 緑釉壺(左) 後漢時代 高44.0cm 出光美術館蔵
灰陶加彩壺(右) 河南省洛陽燒溝漢墓出土 高45.5cm 前漢時代

ン・アトキンス美術館の伝洛陽金村古墓出土とされる緑釉蟠螭文壺(図3)がある。形態、文様はいわゆる戦国式銅器の器形を写したものがあり、戦国時代の作としてよいものである。

しかし中国でのこれまでの発掘では漢以前の鉛釉陶器の出土例はない。河南省洛陽燒溝漢墓は漢代の墓葬の基準とされている。この洛陽燒溝漢墓の前漢後期の墓葬から褐釉陶器、緑釉陶器が出土しており、その年代は紀元前1世紀ごろとされている。筆者も、漢代の鉛釉陶器の初源は前漢後期と考える。しかし、その誕生期の状況についてはこれまであまり論じられることはなかった。

春秋・戦国期の華北の墓葬からは灰陶土器に赤や白、黒などの絵の具で彩色した灰陶加彩土器が出土している。これらの灰陶加彩土器は、いわゆる倣銅陶器、すなわち銅器を模した一種の明器としてつくられたもので、そこに彩色が加えられているのである。華南でも楚墓で彩色を行った灰陶加彩土器が副葬されている。これら楚墓出土の灰陶加彩土器は倣漆土器といえるものである。このように春秋後期から戦国時代、紀元前6~4世紀に色彩に重点をおいた土器の製作が華北・華南でさかんに行なわれたことは、色彩効果に重点をおいた鉛釉陶器の出現の前夜の状況ととらえることができるのである。

最近、秦始皇帝陵の2号兵馬俑坑から極彩色の人物俑が出土した。『中国文物報』(1999年7月13日号)によれば、使われている顔料は紅、緑、黄、紫、黒、白、橙などの色である。紅色は朱砂、紫色は硫酸銅、さらに鉛丹や鉛白等、鉱物顔料を使用している。袁仲一氏は「鉛丹と鉛白は化学的につくられた顔料である。硫酸銅も化合物であり」この時期、顔料に鉛化合物を用いていることは注目すべきことであるという。鉛丹や鉛白は鉛釉陶器の釉の基礎的成分であり、これに酸化銅や酸化鉄を加えることによって緑釉、褐釉ができるのである。しかし秦代には鉛釉陶器はつくられた例はなく、その誕生は前漢時代後期まで待たねばならない。

漢代の鉛釉陶器には褐釉と緑釉(図4)があり、褐釉陶器がまずつくられたといわれる。筆者が



図5 緑釉鴟鵂 河南省三門峽市
前漢墓出土 高 26 cm 前漢後期

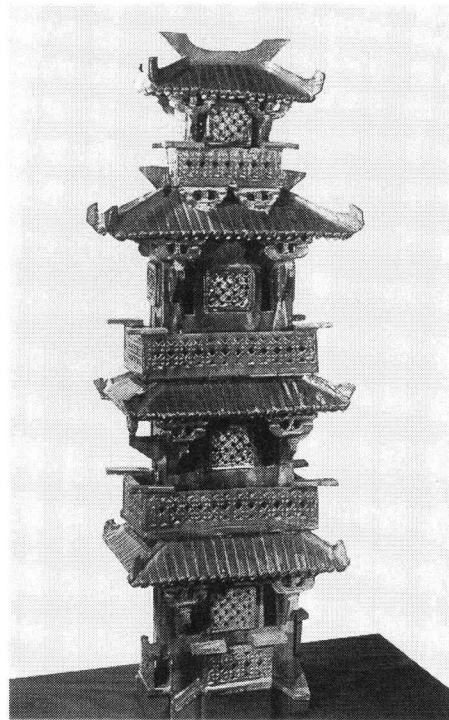


図6 緑釉樓閣 山東省高唐県出土
高 130.2 cm 後漢時代

知り得た確実な前漢代の鉛釉陶器の出土例は河南省済源泗澗前漢墓と同省三門峽市前漢墓、内モンゴル自治区バオトウ市召湾前漢墓出土の褐釉や緑釉陶器である。これらの前漢墓で出土しているのは鴟鵂や桃都樹、人物図温酒尊など独特の器形と、神仙的思想を強くにおわせる鉛釉陶器である。済源泗澗前漢墓から出土した褐釉桃都樹は、郭沫若氏が『芸文類聚』にある「東南に桃都山あり、上に大樹あり、名を桃都という。(中略)。上に一羽の天鷄あり、日初めて出で、光この木を照らす。天鷄則ち鳴き、群鷄、皆これにしたがう」とあるものがこの褐釉桃都樹であろうという。鴟鵂は殷代以来、青銅器の器形にとり入れられた「ふくろう」形の酒器であり、漢代においても加彩陶器でこの形がつけられている。三門峽漢墓出土の緑釉鴟鵂(図5)は1997年中国歴史博物館での『中国文物精華展』に出品され、実見することができた。総体、暗緑色の釉がかかり、ぎょろりとした眼、たくましい脚、ピンとたった耳は一種独特のふんい気をただよわせるものである。それが緑釉がかかることによって土器にはない強烈な印象を与えている。

後漢代になると鉛釉陶器はそうした特殊な器形ではなく、鼎、盆、壺、倉、カマド、井戸、猪圈、踏碓、ひき臼、樓閣(図6)、望楼など日常生活器や、生活風景に存在する建築物や動物、人物などが加わってくる。その製作はほぼ後漢代の間、華北地方を中心としてつくりつづけられ、明器として墓葬の中に副葬された。漢代の鉛釉陶器は『中国陶磁通史』でもいうように「純粹に墓葬用の明器であり」⁽⁸⁾ 実用の器物ではない。

緑釉や褐釉の製作がさかんになるのは前漢末～後漢初期、すなわち紀元前後である。中国の鉛釉陶器の誕生については中国自生説と、西アジアの彩釉陶器の影響説があることはよく知られている。筆者は『古代の土器』⁽⁹⁾ の中では漢代の鉛釉陶器は中国が独自に発明した可能性があることを述べた。その理由は中国と西アジアの距離的な問題、さらには戦国以前に華南地域で鉛バリウムガラスが製作されていること、そして西アジアの鉛釉陶器の器種と中国の鉛釉陶器の器種のちがいなどで

ある。水野清一や三上次男、佐藤雅彦等は中国の鉛釉陶器誕生にローマ時代の鉛釉陶器の技術の伝播の可能性を強く主張してきたが、これまでそれを積極的に傍証する資料は出土していないのである。しかし西アジアにおいては紀元前後、文物の交流はきわめてさかんである。ペルシア湾にあるバハレーン国の紀元前後の墓からはローマ時代の緑釉陶器の壺や瓶、皿、碗、そしてローマングラスが大量に出土している。⁽¹⁰⁾



図7 緑釉双耳壺 ローマ時代 大英博物館蔵

こうした事実をみる時、西アジアの文物が東アジアへ運ばれる可能性は十分に考えられる。アフガニスタンのベグラム遺跡からはローマングラスが出土している。ベトナムのオケオ遺跡からはインド系の文物とともにローマ時代の金貨が、漢代の夔鳳鏡とともに出土している。⁽¹¹⁾岡崎敬はこのオケオ遺跡出土のローマ金貨について「ローマ直接の使節ではなく、むしろ、インド系商人」がもたらした可能性があるという。このように東西の文物の交流は一元的ではなく、何段階かのステップがあることは当然のことであり、西アジアの彩釉陶器の技術、もしくはローマ時代の鉛釉陶器(図7)が中国にもたらされた可能性はにわかには否定できないようにおもわれる。しかしそれは、今は可能性があるということにとどめおき、その結論は将来にゆだねる他はないだろう。

むしろ中国においてそうした技術、すなわち金属化合物を用いた鉛釉陶器を発達させる素地がこのころ、すなわち紀元前後の漢代に存在したことは認めてよいところである。緑釉や褐釉で飾られた陶器は灰陶土器とはことなる、一種金属的な雰囲気をつよくもったやきものであり、それが墓室に副葬されることによって葬送の儀礼をはなやかなものにしたことは間違いない。金銀器と鉛釉陶器の組合せは「厚葬の風」のためのアイテムであったのである。緑釉や褐釉の陶器が金属器を模したものが多いため、その色彩は青銅器の「緑」色、金器の「褐」色を模したのではないかと説く説がある。しかし漢代の鉛釉陶器はこうした器皿に限るものではなく、猪圈や樓閣、人物、動物にまでおよんでいる。色彩によって材質感を表現しようという意図は初期の階段からなかった。むしろ緑釉や褐釉によって、まったく新しい「葬送」のための道具をつくりだしたのである。この背景にあるのは「厚葬」の風であり、その表現としてこうした「ぜいたくな」土器が用いられたのであろう。その技術的背景にあるのは秦以前の化学的な知識と、高火度釉陶器などの施釉陶器の技術の完成である。

(2) 唐三彩の日本・朝鮮の鉛釉陶器への影響

いわゆる唐三彩といわれるものは灰白色の素地に白化粧を加え、緑釉、褐釉、白釉、藍釉を単色もしくは複数にかけた彩釉陶器をいうが、その前段階の「プレ唐三彩」と呼べる鉛釉陶器が6世紀の後半に存在する。筆者はこのプレ唐三彩と呼ぶべきものとして山西省の婁叡墓(570年)や庫狄回洛墓(562年)などから出土している黄釉や緑釉の瓶や壺、天鶏壺などを考えた。⁽¹²⁾素地は灰白色であり、器表には蓮弁文や火炎文、パルメット文、鬼面文などの貼花文が飾られ、黄釉がかけられ



図8 黄釉貼花文壺 山西省太原市
婁叡墓出土 高 40.0 cm
北齊 (6世紀後半)

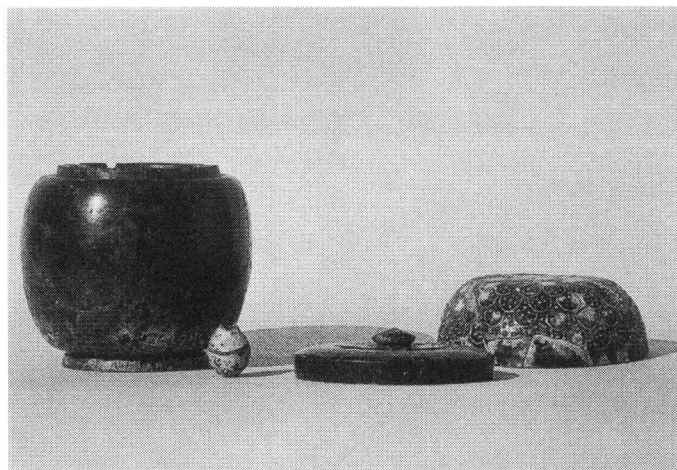


図9 三彩碗・滑石製壺 三重県繩生廃寺出土 碗(右端)
は径 11.0 cm 唐時代

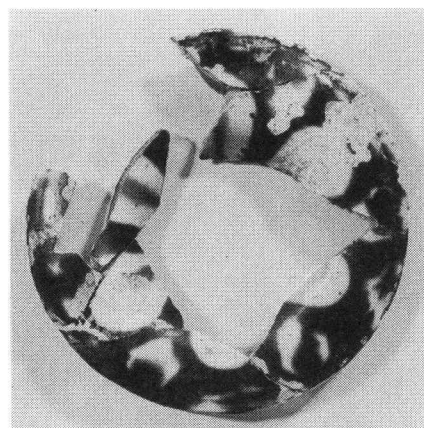


図10 三彩瓶口縁部 福岡県沖ノ島
遺跡出土 径 8.6 cm 唐時代



図11 三彩瓢形盤 陝西省富平県李鳳墓 (675年) 出土
長 36.0 cm 唐時代

ている(図8)。黄釉は酸化鉄を呈色材とした鉛釉であり、焼成温度は磁器ほど高くなく、軟質の陶器である。その器形、装飾は唐三彩につながるものであり、北齊期に中原周辺でこうした鉛釉陶器が存在したことは、唐三彩の前段階的状况としてきわめて興味深い。河南省李雲墓(576年)からは白釉地に緑釉を流しがけにした瓶が出土しており、それは二彩というべき陶器であり、6世紀末には唐三彩の前段階といえる状况は整っていたと考えるべきである。このプレ唐三彩の背景には白磁の出現があることは重要である。すなわち、唐三彩の素地となるのはカオリン土であり、カオリン土をもとにしてつくられた「白磁」は三彩と共通した基盤に発達したやきものなのである。河北省邢窯では北朝後期に白磁の生産をはじめており、隋代の初めには完成度の高い白磁の遺例がある。

これまで唐三彩は8世紀の初頭前後に完成されたと考えられてきた。しかし三重県繩生廃寺出土の三彩碗(図9)や、福岡県沖ノ島遺跡出土の三彩貼花文長頸瓶(図10)などによって7世紀の第3四半世紀には完成された唐三彩が日本に将来されていることが明らかになった。中国国内の7世紀後半の唐墓からも近年唐三彩の出土例(図11)が報告されており、⁽¹³⁾ 今後は三彩陶器の完成の時期は7世紀の中葉前後と考えられるべきであろう。岡崎敬は日本への唐三彩の将来は靈龜2年(716)の第8次遣唐使によって行なわれた可能性が強いことを述べているが、繩生廃寺や沖ノ島遺



図12 三彩長頸瓶 山西省太原市
金勝村唐墓出土 高24.0
cm 唐時代



図15 三彩甗 韓国慶州市朝陽洞出土 高15.5cm 唐時代

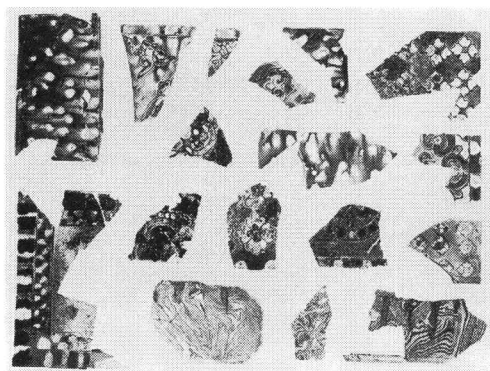


図13 三彩陶枕 奈良市大安寺出土 唐時代

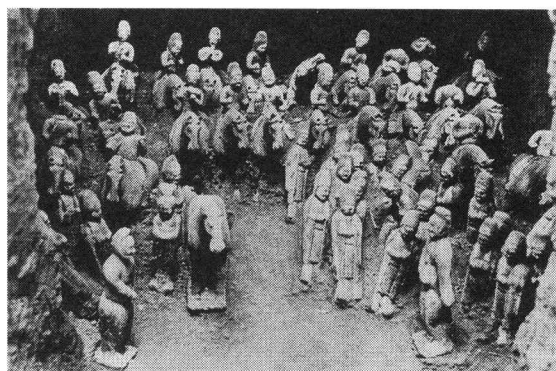


図14 龕に収められた加彩、三彩の俑
陝西省独孤思貞墓 (698年)

跡から出土した唐三彩が7世紀後半にさかのぼることが確実に became. 遣唐使が唐三彩を将来したと考えるならば、それは第5次(天智4年 665)、第6次(天智8年 669)、第7次(大宝元年 701)の遣唐使の将来の可能性を考えなければならないだろう。沖ノ島5号遺跡から出土した三彩貼花文長頸瓶に類似する三彩瓶は山西省太原市金勝村唐墓(図12)から出土している。金勝村唐墓は墓誌など確実な紀年資料はないが7世紀末ごろと考えられている。三重県繩生廃寺も白鳳期、7世紀末、具体的には680~690年代ごろの築造と考えられる。こうしたことからいけば、これら両遺跡出土の唐三彩は必ずしも遣唐使が将来したと考える必然性はなくなってくる。この7世紀の第3四半世紀には遣唐使の派遣は中止されているのである。また最近、群馬県赤堀町の多田山古墳群から三彩宝相華文陶枕が出土した。三彩陶枕を出土した多田山12号墳は7世紀末の築造とされ⁽¹⁴⁾ており、陶枕も築造期の層から出土している。日本国内で出土している唐三彩の器種は陶枕がもっとも多く、奈良大安寺址からは个体数が30個体以上もある(図13)。また奈良県坂田寺址から出土した陶枕片は多田山12号古墳と同じものである。

こうした最近の発掘成果から考えれば、日本への唐三彩の将来の初まりは7世紀の末にあったと考えてよいだろう。唐三彩は中国では墓葬に副葬するための明器（図14）であり、日常の器として用いられたことはこれまで確認されていない。墓葬への三彩の副葬が爆発的に行なわれるのは8世紀初頭である。それは永泰公主墓（神龍2年葬706）や章懐太子墓（同年）、懿徳太子墓（同年）などの副葬例などによって明らかである。日本に三彩陶器が将来されたのは、そうした唐三彩の副葬が爆発的に増大する直前と考えられる。すなわち三彩陶器が中原で完成し、その存在が認識される段階にいちやく日本に運ばれたと考えてよいのである。すなわち唐三彩は一種の「珍貴」なる文物として将来されたとも考えることもできるだろう。筆者はかつて唐三彩が遣唐使ではなく、新羅ルートで運ばれたことを推測したことがある。⁽¹⁵⁾

韓国国内ではこれまでに唐三彩が出土した遺跡は非常に少ない。金寅圭氏の集成によれば次の通りである。⁽¹⁶⁾

- 慶州市朝陽洞火葬墓 三彩鏡（図15）
- 慶州市皇龍寺址
- 慶州市弥勒寺址

新羅王朝でも唐三彩は、墓葬への副葬品ではなく、仏寺の什物、ないしは墓葬用器として使用されていたと考えるべきだろう。慶州市朝陽洞の火葬墓の場合でも、石櫃の中に唐三彩の鏡が入れられ、鏡の中に人骨が納められ、新羅製の佐波理の蓋がかぶせられていた。和歌山県伊都郡高野口町で出土した奈良三彩壺も石櫃の中に入れられ、蔵骨器として使用されており、慶州市朝陽洞の場合と全く同じ使用法であることは実に興味深いことである。

改めて日本の唐三彩の出土した遺跡を考えると、平城宮や平安京、各地の官衙的な遺跡がほとんどであり、それは明器として用いられたのではなく「珍貴なるもの」、もしくは一種の舶載品として珍重されたのである。沖ノ島遺跡は古墳～奈良・平安時代の国家的祭祀が行なわれた遺跡と考えられており、国産の須恵器や祭祀用具に加えて、朝鮮製の金銅製馬具やササン・ペルシアのカットグラス、そして唐三彩長頸瓶が奉獻されている。唐三彩は明器ではなく、珍宝と理解されていたのである。この事実は日本での唐三彩の位置づけを考える上できわめて重要な点である。新羅王朝においても唐三彩は同じような位置づけで理解されていたと考えてよい。

ふりかえって中国での唐三彩の位置づけについても考えてみる必要がある。これまで唐三彩を出土した唐墓は河南省洛陽市、陝西省西安市郊外の王陵墓、貴族墓に集中しており、その使用層はきわめて高い地位の被葬者であったことは間違いない。しかし、唐三彩が唐代の王侯・貴族層に受け入れられる前段階の北朝期で、いわゆる鉛釉陶器を明器として副葬したのは鮮卑族を中心とした塞外民族であった。彼等は本貫は塞外の民族であるが、北朝の官僚機構の中にとり入れられることによってその地位を築いたのである。この時期、中原の貴族墓からは鉛釉陶器は出土していない。すなわち、こうした新生の彩釉陶器はまず鮮卑族など周辺の民族の中で誕生し、時をおいて中原の唐王朝の中に「いろいろのある」副葬品としてとり入れられたのである。山西省の北齊墓からはササンペルシアの金銀器やガラス器、コイン等が出土していることはこれまで報告されているところである。西方からの珍宝が直接に中原に入らず、まず周辺の民族の中に運ばれ、彼等がそれを受け入れたのである。そうした中で彩釉陶器が誕生し、彼等の墓葬を飾ったのである。さらにいえば北齊

期の鮮卑族の墓室の内壁は行列図や人物図などが極彩色で描かれ、それは盛唐代の中原の王墓をほうふつとさせるものである。漢代の鉛釉陶器が前漢末に突如として出現し、厚葬の風の流行にともなって発達したように、唐三彩も、漢代と同じように厚葬の風の流行とともに発達したやきものなのである。

日本出土の唐三彩が墓葬のための明器でないことはいうまでもないが、その位置づけは唐代の状況とそれほど大きく異なるものではなかったといえる。すなわち、新生の美しいやきものとして受け入れられ、中国では墓葬を飾る装飾品

品（デコラティブ・アート）として用いられ、日本では珍宝（舶載品）として珍重されたのである。

唐三彩を模した奈良三彩（図16）がつくられるのは、これまで知られた資料からいえば、神亀6年（729）に没した小治田安万呂墓がもっとも古い例である。代表的な奈良三彩として正倉院三彩がある。檜崎彰一によれば正倉院御物は天平勝宝8年（756）に、聖武天皇崩御四十九日の忌日にあたり、光明皇太后が東大寺盧舎那仏に献じたものといわれている。献物帳には三彩陶器の記載はないが「戒堂院聖僧供養盤 天平勝宝七歳七月十四日 東大寺」の墨書のある二彩盤があり正倉院三彩の年代もほぼこの年代に製作されたものと考えられている。こうした例からいえば奈良三彩の年代は8世紀の中葉前後にその誕生があり、国家儀礼の什物として用いられたのである。しかし沖ノ島の場合では奈良三彩は「富寿神宝」（818年初鑄）と共伴しているものがあり、その製作は平安時代にまでおよんでいる。奈良三彩は彩釉陶器であるという点で唐三彩と同じ鉛釉陶器の範疇の中にとらえることはできるが、製作技法、器形で唐三彩と異なることはこれまで指摘されてきた。また技術的な影響関係についてはこれまで漠然と唐三彩を模した国産の彩釉陶器とされてきた。しかし先にも述べた通り、日本への唐三彩の流入の時期が7世紀後半、もしくは末葉であるとなれば、両者の直接的な影響関係は改めて考えなおす必要が生じる。すなわち、唐三彩の流入と、日本での彩釉陶器の生産の開始には30～50年余りの空白期間が考えられるのである。

韓国でも統一新羅時代の中期に蔵骨器を中心として緑釉や三彩陶器がつくられている。緑釉陶器が統一新羅時代の前期につくられ、その後、8世紀代に三彩陶器が製作されている。韓炳三氏⁽¹⁷⁾によれば、彩釉陶器は蔵骨器が中心で灰釉印花文が多い。ただ年代の明らかなものはほとんどなく、おおよそ、その製作は7世紀の中葉から後半であると考えられている。筆者は統一新羅時代の三彩器についてそれほど多く見ていないが、器形・施文などは唐三彩の影響はほとんどなく、基本的には新羅時代の灰釉陶器の流れの中にあるものであり、装飾法については金属工芸の影響が強くとめられる。新羅三彩は日本の奈良三彩ほどに発色はあざやかではなく、その製作期間もきわめて短い時期であった。

檜崎彰一氏⁽¹⁸⁾は日本の緑釉陶器の誕生には統一新羅前期の緑釉の伝播が大きな影響を与えていると述べている。白鳳期の緑釉陶器はまさにその通りであり、白鳳～奈良時代前期の寺院址や都城址



図16 三彩壺 福岡県沖ノ島1号遺跡出土
高4.6cm 奈良時代

から、新羅産の緑釉陶器が出土している。その年代が、中国の唐三彩が日本に流入した時期とほぼ重なるのである。日本の奈良三彩の誕生の背景には、新羅の緑釉と唐三彩の両者の流入があり、その中で色彩あざやかな奈良三彩が生まれたと考えることができよう。先に筆者が考えたように、唐三彩が新羅経由で流入したものであるとするならば、日本の奈良三彩誕生には渡来人の影響は十分にありうると考えていいのではないだろうか。唐・新羅・日本の三者の関係を考えれば、奈良三彩もそうした国際関係の中で誕生したと考えてよいのである。

(3) 中国の三彩と初期イスラム期の多彩釉陶器

唐三彩は8世紀中葉の「安史の乱」を境に、その焼造が急激に衰退するとされている。それはいわゆる盛唐時代の厚葬の風の衰退と機を一にするものであり、墓葬のための三彩陶器の副葬の流行は、たしかにこの時期を境に急激に少なくなっていることは事実である。

しかし三彩の技術はその後、湖南省長沙銅官窯や四川省邛峽窯などに受けつがれた。それは青磁の釉下に鉄絵具や銅紅釉で彩色したり、人物や文字、鳥文で装飾した一群である。こうした釉下彩装飾の青磁は輸出陶磁器として日本や朝鮮、東南アジア、西アジアに運ばれたことはアジアの港湾遺跡から出土する長沙銅官窯磁器が示すところである。そうした流れとともに、典型的な三彩の系譜を受けついだものもつくられていることも注意しなければならない。白磁の素地に褐釉・緑釉をかけた三彩陶器である。このいわゆる「晩唐三彩」の窯とその年代については確実な資料はない。

晩唐三彩としてあげられるものは東京国立博物館や大和文華館、ギメ美術館(図18)の高火度質の三彩壺や、揚州市博物館(図17)の三彩水注などである。ギメ美術館には三彩台付き壺と三彩壺があり、素地はカオリン質の白磁土であり、緑釉と褐釉を流しがけにしている。施釉法は基本的には盛唐期の三彩と同じであるが、典型的な唐三彩のような丁寧な施釉ではなく、流しがけのような施釉である。このギメ美術館の三彩台付壺と類似する白磁器(図19)が河北省臨城県の唐墓から出土している⁽¹⁹⁾。この唐墓の年代は9世紀後半と考えられる。白磁器は邢州窯産であり、晩唐期においても邢州窯などで三彩器の製作がつづいていたことをうかがわせる重要な例である。

晩唐三彩の中に型づくりの一群がある。これは小杯や方形盤などで河南省洛陽市の白居易館址(図20)や揚州唐城址(図21)から出土している。器形は銀器を写しており、見込みに花文を印刻し、緑釉を点彩したり、流しがけにしている。こうした小品も邢窯、もしくは河南省鞏県窯などで生産されたものであろう。この銀器写しの小品がイラクのサーマッラー遺跡から出土している。サーマッラー遺跡は9世紀前半から後半にかけてのアッバース朝の都市遺跡であり、そこで出土する陶磁器は基本的には実用器として使用されたものである。

サーマッラー遺跡からはこうした三彩の小品とともに白磁の盤に、緑釉を点彩したもの(図22)や、流しがけにしたもの(図23)が出土している⁽²¹⁾。直径は30cmを越える大きな盤であり、なかには40cm近い大盤もある。この白磁緑彩盤は晩唐期の白磁盤の形式に通じるものが多いが、口縁を平縁にしたイスラム銀器の形を写したとおもわせるものがある。この白磁緑彩盤はサーマッラー遺跡の他にエジプト・フスタート遺跡、スリランカのマンタイ遺跡(図24)や東南アジアから出土している。この白磁緑彩器についてはジェシカ・ローソンも注目しており、長沙銅官窯や越州窯青磁、邢州窯白磁とあわせ、晩唐期の輸出陶磁器のなかで注目すべき彩釉陶器である。この白

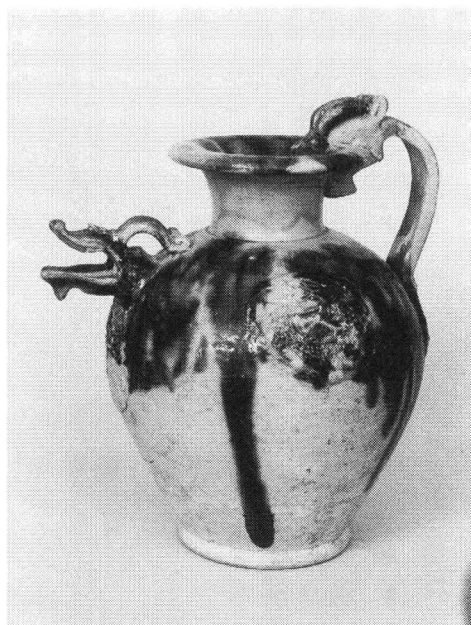


図17 三彩水注 江蘇省揚州市唐墓
出土 高28.5cm 唐時代



図18 三彩台付壺 高
83.8cm 唐時代
ギメ美術館蔵

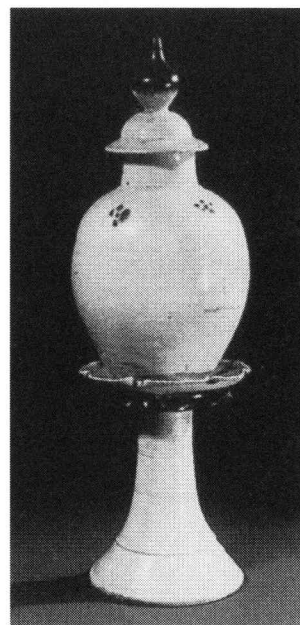


図19 白磁台付壺 河北省
臨城県 唐墓出土
高58cm 唐時代

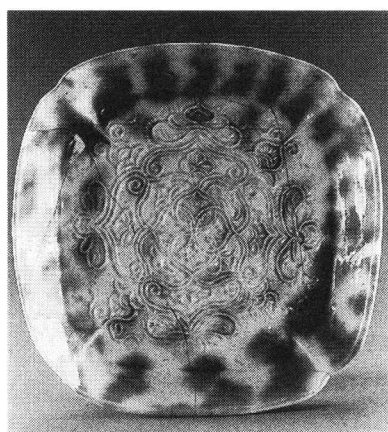


図20 二彩印花方形盤 河南省
洛陽市伝白居易館址出土
径12.7cm 唐時代



図21 三彩盤・皿・枕 江蘇省揚州市唐城出土 唐時代

磁緑彩盤は中国国内では江蘇省揚州唐城址から出土している。揚州唐城は8世紀中葉から10世紀代に栄えた国際貿易都市であり、長沙銅官窯青磁、越窯青磁、耀州窯青磁、邢州窯白磁、定窯白磁など中国各地の陶磁器が集積されている。白磁緑彩陶器は量的にはそれほど多くはないが、同じものがサーマラー遺跡(図25)から出土していることは注目すべきである。揚州唐城からは初期イスラム期の青釉壺も数十点出土しており、9世紀代の中国とイスラム圏の交易の実態を示す重要な遺跡である。

この白磁緑彩盤の生産地について中国の研究者は河南省鞏県窯としているが、輸出陶磁器ということに注目するならば長沙銅官窯を含めた華南窯の可能性を否定できない。これまで晩唐三彩は、唐三彩の遺制を受けついで三彩の小品が主にとりあげられてきたが、出土量はきわめて少なく、むしろ量的には白磁緑彩器を注目すべきであろう。それは次の点においてである。すなわちこの白磁

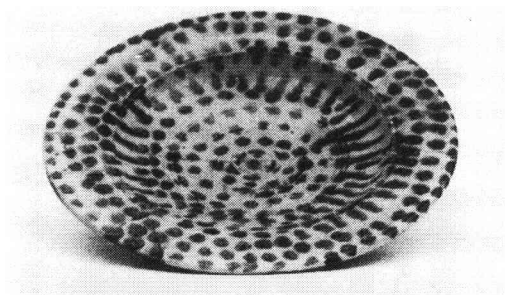


図22 白磁緑彩盤 江蘇省揚州市唐城出土
径25.6 cm 唐時代

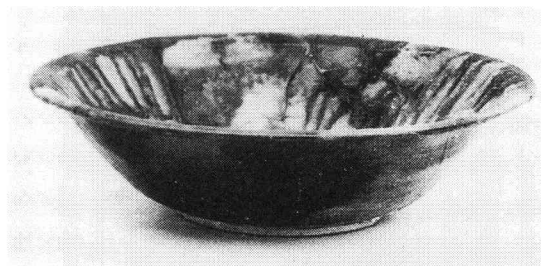


図23 白磁緑彩盆 江蘇省揚州市唐城出土
径33.8 cm 唐時代

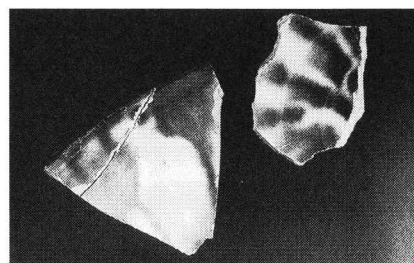
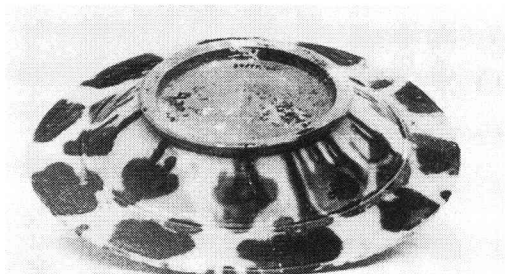


図24 白磁緑彩片 スリランカ・マ
ンタイ出土 唐時代

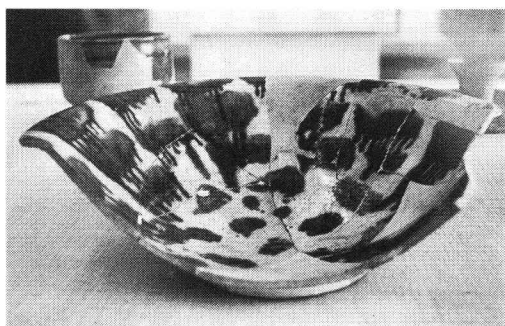


図25 白磁緑彩盆 イラク・サーマッラー
出土 唐時代

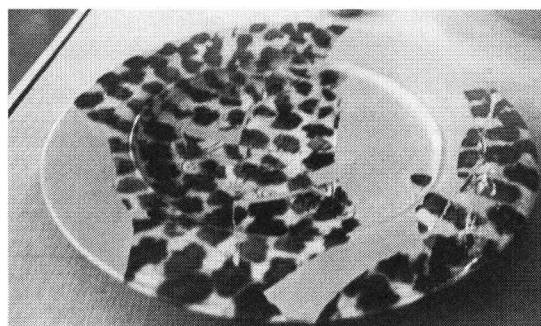


図26 白釉緑彩刻花盤 イラク・サーマッ
ラー出土 9世紀

緑彩盤と酷似する白釉緑彩器（図26）が9世紀のイスラム圏でつくられているのである。白釉地に緑釉や藍釉、ラスター釉をかけた多彩釉陶器といえるものである。器形も中国産の白磁緑彩器とイスラムのそれは酷似するのであり、両者の影響の密なことを示している。

かつて初期イスラムの多彩釉陶器が、中国の唐三彩の影響の下で発達したと説く考えが三上次男氏を中心となえられた。三上氏は「白地に数色の鉛釉を交えて色あざやかに器面をかざる陶器は、いままでイスラム地域にあらわれたことはなく、これが突如として姿をあらわした点はきわめて注意を要する。（中略）東方の中国の唐でつくりはじめられた唐三彩と色調・技法ともにくさぶる類似しているのである」と、初期イスラムの多彩釉陶器と唐三彩の影響にきわめて高い関心を示している。その一つの例証としているのが伝フスタート遺跡出土の唐三彩の盤と鳳首瓶である。この2点の唐三彩は現在イタリアのファエンツァ陶磁博物館に収蔵されており、筆者も実見した。典型的な8世紀初頭の唐三彩であり、盛唐期の唐墓から出土しているものと同じタイプである。しかしこの形の唐三彩は日本からは出土しておらず、中国以外で出土したという例はない。さらにはフスタートから出土する中国陶磁器は長沙窯、邢州窯、越窯がもっとも早い時期の中国陶磁であり、それは9世紀後半～10世紀である。そうした年代から考えれば、この唐三彩は輸出陶磁器として

はあまりにも早く、フスタート遺跡から出土したという可能性はきわめて低いと考えなければならぬだろう。

むしろイスラム圏と中国との陶磁器の交易の状況を考えれば、一方的に中国の陶磁器がイスラム圏の陶器生産の発達をうながしたとは考えられない。相互の交流、イスラム圏の嗜好、色彩感覚が中国の陶磁生産に影響を与え、ある意味での「新生の」鉛釉陶器を中国に誕生させた可能性を考える必要がある。先にあげた白磁緑彩陶器も、中国で独自に発達した鉛釉陶器ではなく、イスラム圏との交易の中で新しく誕生した鉛釉陶器なのである。さらにいえば晩唐期に復活した中国の三彩陶器も、単に唐三彩の伝統の復活と考えるよりも、イスラム圏との交易の上で、色彩を求めたイスラム陶器の影響を強く受けて中国で復活したと考えるべきであろう。唐三彩があくまで墓葬のための副葬品として製作されたのに対し、晩唐期の三彩は「日常器」の生産に基盤をおいて発達したやきものである。そうした質的な転換はイスラムとの交流の結果、生まれたことなのである。この点については中国における晩唐期の三彩陶器の資料の増加をまって改めて考えるべき点である。さらに晩唐期の三彩の生産地を華北の一地方だけに求めるのではなく、華南をも含めた広い地域で考える必要がある。

②……………鉛釉陶器の陶磁史上の位置づけ

これまで述べてきたように東アジアにおける鉛釉陶器は中国を中心に発達した。しかしそのありかたは中国陶磁史においてもきわめて特異な位置におかれなければならない。やきものは基本的には生活形態の発展の上で誕生したものである。すなわち土器から釉陶へ、そして高火度焼成の青磁、白磁へと発展していったのである。

そうした発展段階からいえば、中国における鉛釉陶器はまさに「突如」として出現したと理解してもそれほど大きなあやまりはないだろう。その特徴は酸化鉄や酸化銅などの金属化合物を鉛釉に加えることによって生まれる「彩釉」陶器である。土器や陶器に色彩を求める動きは、春秋・戦国時代の灰陶加彩陶器にまずみられる。しかしそれは焼成後に絵の具を用いて赤や白、黒などで青銅器や漆器の文様を写すという消極的な彩色法である。

それに対して鉛釉陶器は土器の彩色とは異なり、製作の初めから緑色や褐色、黄色に焼きあがることを想定してつくられたやきものである。中国において施釉陶器は紀元前15世紀、殷代中期にはじまり、春秋期に一つの完成をみた。いわゆる「原始磁器」、「原始青磁」といわれるものである。技術的には釉陶器はこの時期にほぼ完成されたといってよい。一方鉛釉陶器は原始磁器とは異なり、酸化鉄や酸化銅といった金属化合物を加える必要があり、その製法は原始青磁とは異なるものである。この技術の誕生はこれまで述べてきたように中国自生説と、西方の影響説があり、今後は両者をあわせ考えていく必要がある。筆者は今の段階では両者、すなわち中国の陶磁生産の発展と、西アジアからの影響の両方を考えることがもっとも無理のない説だと考える。

漢代に誕生した鉛釉陶器は、北朝の白磁の生産のはじまりとともに質的にも、色彩効果としても、きわめてクオリティの高い彩釉陶器となった。すなわち「唐三彩」である。唐三彩の器種は日常生活器と、人物や動物（馬、駱駝）、神将がありそれは墓室という特殊な空間を埋める儀式のため

のアイテムである。すなわち一時的（すなわち葬送時）に、墓室と葬儀の効果をたかめるために用いられたものが唐三彩である。中国では唐三彩は墓葬の中からのみ出土するため、それは明器として副葬用のための陶器につかわれたと理解されている。そのことは事実であるが、葬礼という一族の重要な儀式に唐三彩が用いられたことは、葬礼に参列する者を含めて、一種の権力を誇示するための威信財と考えてもよいのである。事実、唐三彩は官位に応じてその使用の数が定められている。唐三彩が葬儀のためにのみ使用された一過性の陶器と考えることは、必ずしも唐三彩の本来の意味を理解するためには十分ではないといえるだろう。

ひるがえって日本における奈良三彩や、日本出土の唐三彩も基本的には中国の唐三彩ときわめて近い用いられ方をされていたと考えていいのではないだろうか。すなわち舶載品として中国から将来された唐三彩は一種の「珍貴」なる文物であり、それを所有することは一種のステータスを示すものであったに違いない。その唐三彩を模した奈良三彩も、基本的には大きな儀式をいづる一種の「威信財」であったことは、大仏開眼会での三彩を含めた彩釉陶器の使用のされかたをみても十分に考えられるところである。

しかし唐三彩は、晩唐期に、イスラム世界との交渉が密になることにより、大きな変質をとげることになる。すなわち、単に見せるための器から、美しくいづられた実用器への変化である。中国において彩釉陶器がどのように生活の場で用いられたのかは明らかではない。しかし中・晩唐期、河南省の白居易の館や、揚州唐城から鉛釉陶器が出土した事実をみれば、彩釉陶器が何らかの形で生活の場で用いられたことは疑いのないところである。

中国陶磁の歴史の上で、酸化鉄や酸化銅などの金属化合物を釉薬の中に加えて彩色をやきものの中に求めることはきわめて特殊なことであった。それは漢代の初期の鉛釉陶器において、きわめて特殊なことであったのである。それが一種の権威の象徴として用いられたのが唐三彩であり、その流れを受けついでつくられたのが奈良三彩であったのである。

渤海三彩、遼三彩なども、実用の器として用いられるものではなく、中原の風を受けついで、遺制として周辺諸国でつくられた彩釉陶器とってよいであろう。

註

- (1)——愛知県陶磁資料館『日本の三彩と緑釉』1998年。1991年
- (2)——拙稿「揚州—サマラ 晩唐の多彩釉陶器・白磁青花に関する一試考」(『出光美術館研究紀要』第3号1997年) (9)——拙著『平凡社版 中国の陶磁① 古代の土器』平凡社 1998年
- (3)——拙稿「中国における鉛釉陶器の発生」(『出光美術館研究紀要』第4号 1998年) (10)——“Bahrein la civilisation des deux mers, de Dilmoun a Tylos” Musée Monde de Arab 1999 Paris
- (4)——梅原末治「玻璃質で被ふた中国の古陶」(『大和文華』15 1954年) (11)——岡崎敬「雲南省・石寨山とヴェトナム・オケオの遺跡」(同氏『東西交渉の考古学』所収 1973年平凡社)
- (5)——水野清一「緑釉陶について」(『河出版 世界陶磁全集8 中国上代篇』河出書房新社 1954年) (12)——拙著『平凡社版 中国の陶磁③ 三彩』1995年 平凡社
- (6)——『中国文物報』1999年7月13日号。 (13)——岡崎敬「近年発見の唐三彩について—唐・新羅と奈良時代の日本」(同『中国の考古学 隋唐篇』所収 同朋舎 1987年)
- (7)——郭沫若「桃都、女媧、加陵」(『文物』1973-1)
- (8)——中国硅酸塩学会編『中国陶磁通史』平凡社

- (14)——多田山古墳群出土の唐三彩枕は群馬県文化財センターの好意で実見することができた。古墳の年代については7世紀末とされている。陶枕は石室の前庭部と考えられる場所から出土しており、ほぼ完形に復元できるものである。ただ前庭部から出土することの意味は明らかではない。築造時に入れられたものであるとするならば、前庭部におかれたとするのは不自然である。墓前祭祀の折に埋納された可能性を考える必要がある。拙稿「二つの舶載陶器—唐三彩と新羅緑釉—」(『陶説』584 2001年)、深澤敦仁「多田山十二号墳出土の唐三彩・陶枕について」(『陶説』584 2001年)
- (15)——拙稿「韓国慶州出土の唐三彩鏡をめぐって」(『陶説』385 1985年)
- (16)——金寅圭「韓国出土の中国陶磁」(『貿易陶磁研究』No. 19 1998)
- (17)——韓炳三「統一新羅の土器」(小学館版「世界陶

磁全集17 韓国古代』1979年)。本稿で韓炳三は統一新羅の鉛釉陶器の使用法を、骨壺としている。

- (18)——同氏の五島美術館における「日本の三彩と緑釉」展の講演会発表(1998年)による。

(19)——『文物』1990-5

- (20)——奈良県立橿原考古学研究所付属博物館「遣唐使が見た中国文化」展図録 1995年

(21)——拙稿註(2)参照

- (22)——J. ローソン M. タイト M. ヒューズ「唐三彩陶器の輸出—近年のいくつかの研究より」1987-1988 イギリス東洋陶磁学会誌 (TRANSACTIONS OF THE ORIENTAL CERAMIC SOCIETY)

(23)——三上次男「中国陶磁とイスラーム陶器の関係に関する二、三の問題—初期のイスラーム多彩釉陶器の系譜—」(『三上次男著作集6 イスラーム陶器史研究』1990年)

(出光美術館, 国立歴史民俗博物館企画展フォーラム講師)

(2000年7月5日受理, 2001年6月22日審査終了)

The Significance and Evaluation of East Asian Lead-glazed Pottery in the History of Chinese Ceramics: in Comparison with West Asia

YUBA Tadanori

Lead-glazed Pottery in China started between fourth century B.C. and fifth century B.C. Green-glazed, brown-glazed, and three-color wares were produced and used for burial goods in the periods of the Han, the Northern dynasties, and the Tang. Basically such lead-glazed ware was color-glazed pottery emphasizing the coloring, and they were ornamental ceramics that developed with the prevalence of elaborated burial manners. In Japan, Tang three-color ware became popular in the latter half of the seventh century, and they were identified from fifty sites of the Nara period.

The custom of burying Tang three-color ware with a body for entombment rituals ceased around the middle of the eighth century and went through a qualitative conversion in the context of the ceramics trade with Islamic Culture. In other words, it was to bring forth the lead-glazed pottery for practical use. While white porcelain and celadon were exported, green-glazed white porcelain and three-color ceramics were produced and exported under the influence of the West Asian tastes. Though we should admit that there was technical transmission from Tang three-color ware to lead-glazed pottery of the ninth century, they were utterly different in terms of quality. The development of lead-glazed pottery produced in the East and the West does serve as a very significant material to indicate the trace of East-West interchanges.